
自 分

目次

要 約	2
はじめに	6
1. 小学生の描く自己像	7
●自分の長所と短所.....	7
●今、自分で自信を持っていること.....	11
2. 周囲の人びとから見た自分	15
●他人からの評価とのズレ.....	15
●友だちに言われていやなこと.....	19
3. 小学生の成長感覚	22
●この2～3年で変わってきたこと	22
●今よりよくなりたいこと.....	26
4. 自己像の構造	28
●子どものタイプ別に.....	28
●長所・短所の意味.....	32
5. まとめに代えて	34
シリーズ/講座・子ども調査入門 ③ 調査の歩み25年	深谷昌志.....38
資料1 調査票見本	42
資料2 学年・性別集計表.....	50

調査レポート／自分

要 約



① 自分の長所と短所

「元気がよい」「明るい」「友だちが多い」そして「おもしろい」自分だが、「リーダー的」「しっかりしている」「まじめ」とは思えない自分。そして、最大の欠点は「おちつきがない」というのが、子どもたちの自己像である（図1、図2）。



② 自信について

子どもたちが、自分について最も自信を持っているのは「体がじょうぶ」で「運動神経がある」「まわりの人を楽しくさせる」点であり、「苦しさに負けない力」は13項目中9位でしかない。しかし現代っ子的特性と思われている「歌手やタレントにくわしい」「イラストやまんががうまい」「人前で発表する力がある」「ファミコンがうまい」は、むしろ下位にあり、必ずしも現代の子どもたちが一様な姿をしているわけではないことがわかる（図5）。また学年上昇と共に、自信は全体としてより低下していく（図7）。

千葉市教育センター所員 上杉賢士

東京学芸大学助教授 深谷和子

③周囲の人々のまなざし

自分を最もあるがままに見てくれているのは「両親」、ついで「友人」。自分にいちばん否定的な見方をしているのは「先生」だと思われている(図8、図9、図10)。



④子どもたちの成長感覚

ここ2～3年の間に、自分がよくなってきた面と言えば、「友だちの数」と「明るさ」がまず挙げられ、「正直・素直・まじめさ」などの面ではほとんど変化していないと思われている(図14)。また、勉強に自信のない子どもほど、成長感覚を持ってない点も気がかりだ(図17)。



⑤成長欲求について

一般の現代っ子イメージとは逆に、できることなら、イラストやファミコンがうまい「軽い自分」ではなく、発表力やがんばりを身につけた「存在感のある自分」になりたいと思っているようである(図18)。



調査レポート / 自分

要 約



⑥ 4つのタイプに分けて

子どもたちを、その長所・短所の数で4つに分けて、「よい子型（長所のみある）」「個性型（両方ある）」「没個性型（両方少ない）」「はみ出し型（短所のみある）」と命名してみた（図19）。これと他の項目との関連を見てみると、「よい子型」の子はあらゆる面で他のタイプより積極性を持つが、唯一成長欲求だけは「個性型」のほうがより強い。

また4つのタイプの中で、あらゆる面でポジティブな態度を示さないのは「没個性型」である。ということは、短所だけでも、全く特色を持たないよりはずっと意味があることになる（表1～表8）。

調査概要

1. 調査主題 自分
2. 調査視点 現代の子どもたちは、どんな自己像を描いているか。そして、それが、彼らの「自尊感情」とどのような関係にあるか。
3. 調査項目 自分の長所と短所 / 今の自分に自信があること / 友だちに言われていやなこと / 両親・友だち・先生から見た自分 / 2～3年で変わったこと / 今よりよくなりたいこと、など。

⑦ばくぜんとした将来

子どもたちにとって、将来の自分の姿は、まだおぼろげでしかなく(図21)、また、とくに尊敬する(目標とする)人がある子も少ない(図22)。



⑧よき自己像の形成に向けて

とすれば子どもたちの人格形成には、将来の方向性や目標より、まず現在の自分をどう把握しているか、すなわち「自分」のイメージが、大きな作用を及ぼすのではないか。より確かな自分、力強い自分、信頼に足る自分、数々の個性をもった自分として自分を認知できるようにするためにはどうしたらよいか。これが本調査から示唆された課題であろう。



- 4. 調査期間 1986年(昭和61年)7月
- 5. 調査対象 東京・神奈川・千葉の小学4・5・6年生
- 6. 調査方法 学校通しによる質問紙調査

7. サンプル数 (人)

学年/性	男子	女子	計
4年	205	193	398
5年	289	266	555
6年	271	271	542
計	765	730	1,495

はじめに

この調査レポート「自分」は、小学生たちの自尊感情（self-esteem、自己価値感とも訳される）に迫ってみたい、企図されたものである。

言うまでもないことだが、人間はそれぞれ自分の中に「自分」像を持っている。その像に合わせて人は行動する。わかり易くするために例をあげれば、自分を「肥満型」だと思っている人は、デパートで寒色系の服を選ぶし、「やせっぽち」なら、白やクリームやピンクの服を選ぶ。その人が客観的に見て太り型かやせ型かは、この際どうでもいいことなのだ。要はその人の「自分イメージ」が、青い服を選ぶか、ピンクの服を選ぶかの決め手として働くのである。

この例が示すように、人が日常どのように行動するかは、「自己像」を中心に組み立てられているとも言えそうだ。そしてそのような「自分」像が、まあまあのよきものか、それとも直視できないような不快なものか……これは人間の行動を分析する研究者、とくにその適応のパターンを把握しようとしている研究者にとっては、大きな関心事となる。

話は少しむずかしくなったが、われわれが

小学生たちの「自分」像をとらえてみようとした意図は、それが「欠点もあるが長所も持っているまあまあの自分」として自己肯定されているものかどうか。すなわち、日常の行動に積極性を失わないだけの、健康な姿を保っているかどうかを探ってみたかったのである。

ご承知のように、最近では「いじめ」をはじめとして、子どもの世界には各種の問題が広がっている。それはひょっとしたら、子どもたちの自己像に何らかのかげりが生まれてきていて、それがなせるわざなのかもしれないとも考えられるのである。

しかし、話を自尊感情にまで広げてしまうと、とてもこの小さなレポートにはおさまりに切れなくなってしまう。ここではただ、われわれが小学生たちの「自分」像をとらえようとした背景には、臨床心理学で人の適応を考えていく際に重要な概念である「自尊感情」が、どのくらい子どもたちの中に形成されているかという関心があったからだ、というくらいにして、さっそくレポートに入ることにしよう。

1. 小学生の描く自己像



//// 自分の長所と短所 ////

まず子どもたちが、自分について抱いている長所・短所のイメージを明らかにすることからはじめよう。図1に示したように、「元気がよい」「明るい」を自分の長所として挙げている子どもが7割、そして「友だちが多い」の6割。これに「おもしろい」を加えた4項目で、現代っ子の特徴がほぼ浮かび上がってきているように思われる。「元気がよくて、明るくて、友だちが多くておもしろい」。外側からとらえられるこのイメージは、おそらく時代を越え、社会を越えた一般的な子ども像だろう。しかし他方で、時代や社会が変われば、子ども像、すなわち子どもの成長の姿に微妙な変化が見られるのも事実だろう。とすると、問題はこうした外側の姿ではなくて、子どもたちの内面にこそ、その時々時代の特色を見ることができのかもしれない。そうした意味では、図の下部、つまり子どもた

ちが自分のイメージではないと思っている部分の項目に目を向けてみよう。ここには「リーダー的」「しっかりしている」「まじめ」などのやや重たい人格的側面が並び、いわば「存在感」に欠ける自己像を描いているようすが描き出されている。昔の子どもたちも、表面は現代っ子と同じように、子どもらしく明るい姿をしていたであろうが、この辺に、おそらく違いがあったのではなからうか。そうした意味では、旧人類的なわれわれ世代から見ると、食物にせよ酒にせよ、タバコにせよ音楽にせよ、また人間やその生き方までもが、軽口でソフトなものを志向する現代をあざやかに反映しているかのような現代っ子たちの性格プロフィールが、どこか気に入らないものにも思えてくるのだ。

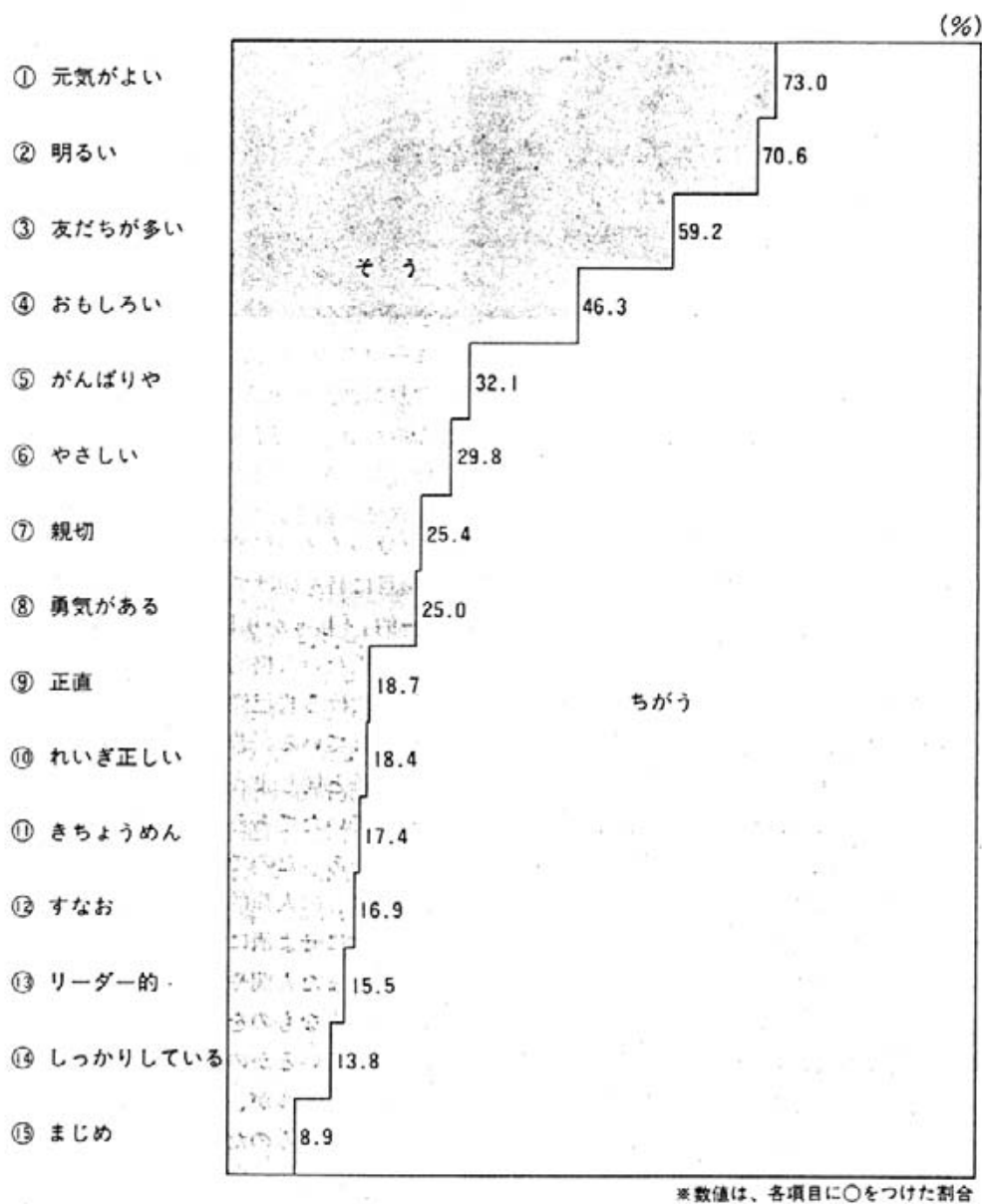
その傾向は、次の図2に示した短所についての結果からもうかがえる。自分は決して、

「らんぼう」でもなく「暗く」も、「いじわる」でもない。ただ、ちょっと「おちつき」がなくて、「自分勝手」なところがある、というのである。

そして、この結果を男女別に示したのが、図3と図4だ。図3の長所では、「やさしさ」

や「親切さ」において、わずかに女子が上回る傾向が認められるが、全体としてのプロフィールは似たりよったりだ。図4の短所もほぼ同様に、わずかに「おちつきがない」「だらしがない」の項目で、男子がおよそ10%ほど女子を上回っているだけだ。性役割が年々

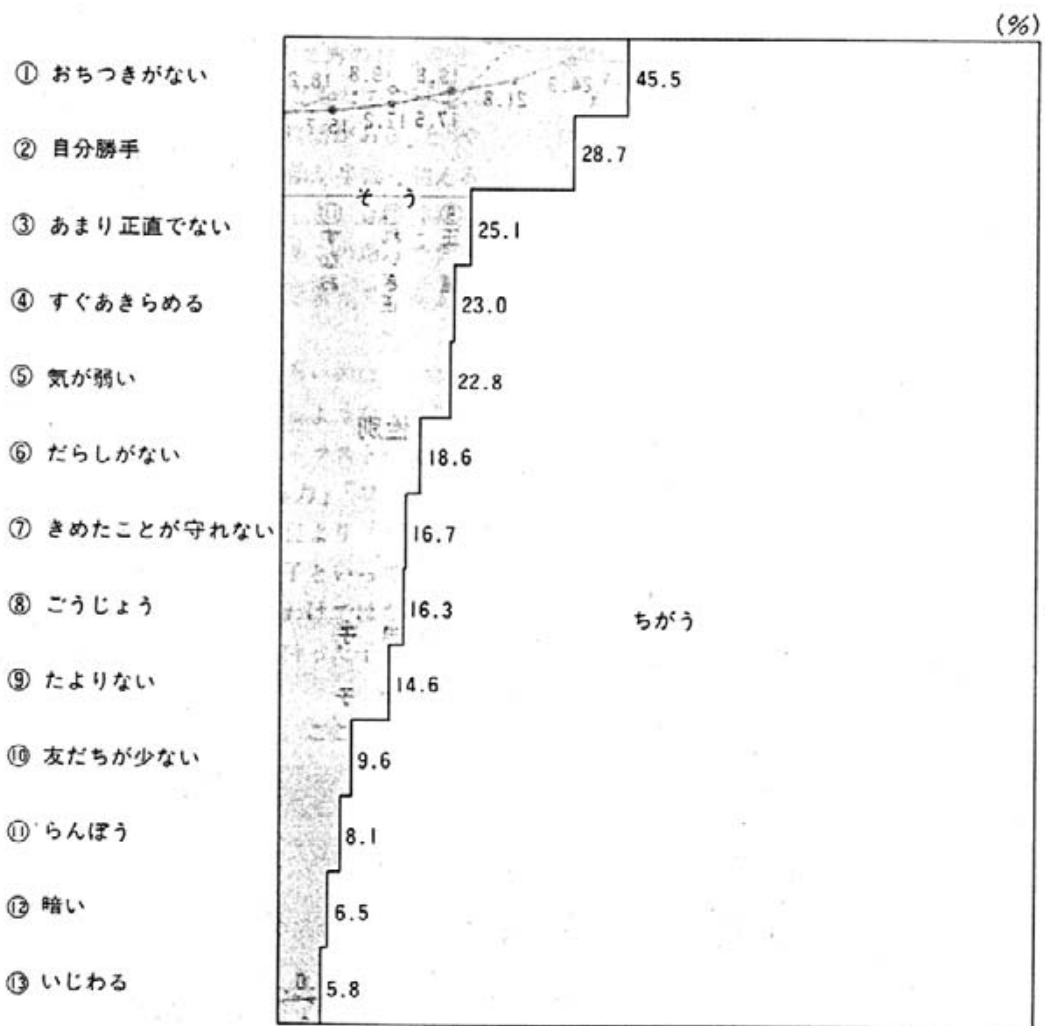
図1 自分の長所だと思うこと



縮小してきていて、成人の男性と女性のあり方は、すべての面において、50年前70年前と大きく変化してきている。服装ひとつをとってみても、現代の若者たちの性別を見分けるのは、ひどくむずかしい作業だ。かつての性役割には、かなり無理をした文化的割りつけ

があった。だから現代の性役割の縮小傾向は、全体としては自然で歓迎すべき傾向なのだが、小学生たちのプロフィールのこの均質化を見ていると、ちょっと味気ない気もするのだが、それはおとなの身勝手かもしれないのである。

図2 自分の短所だと思うこと



*数値は、各項目に○をつけた割合

図3 自分の長所×性別

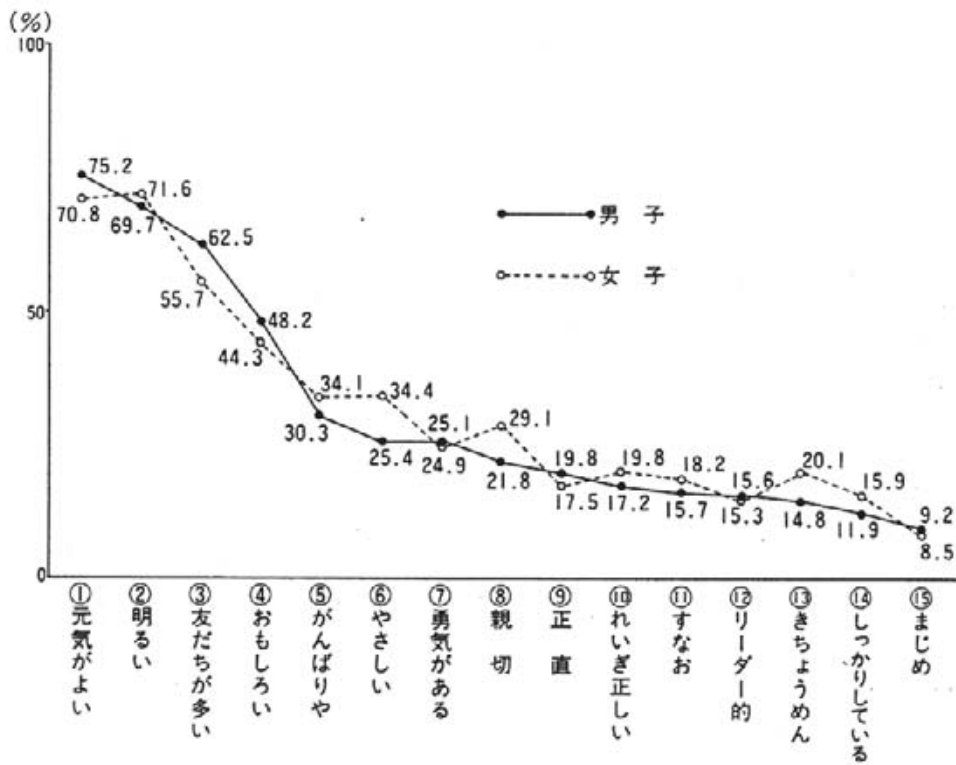
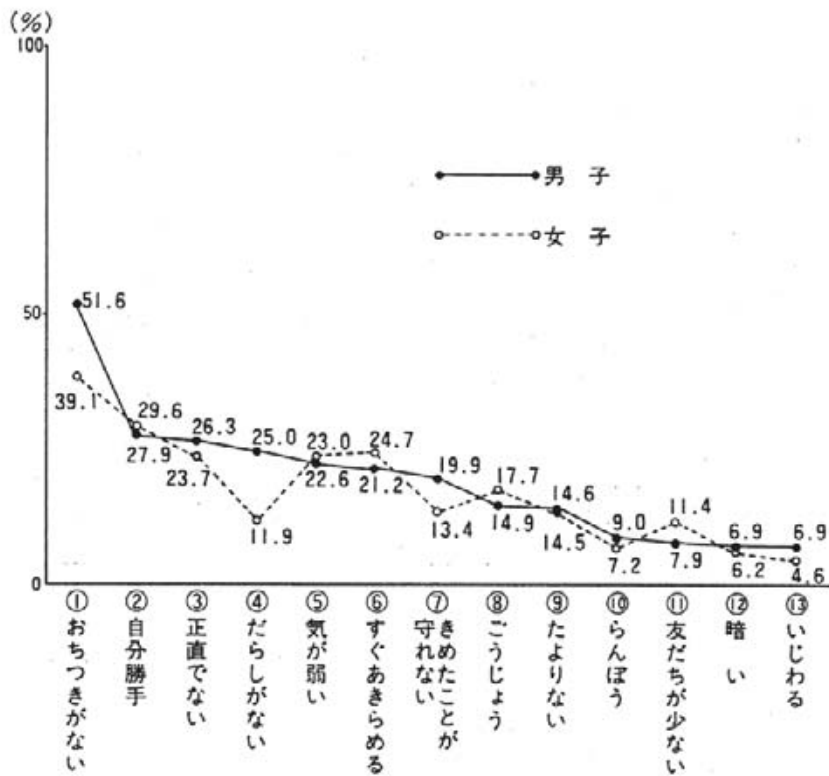


図4 自分の短所×性別



/// 今、自分で自信を持っていること ///

さて、現代っ子たちの性格特性を見てきたところで、次に少し角度を変えて、能力や態度といった側面からの接近を試みよう。図5には、今、子どもたちが自分のどんな点に自信を持っているかをたずねた結果を示した。冒頭に述べた「自尊感情」という考え方からすれば、より多くのことがらに、「強い自信」まではいかなくても、「まあまあの自己肯定」ができることがすべての子どもたちに望まれるのだが、結果は、「とても自信がある」と「やや自信がある」を加えた数値が半数を越える項目は、「体のじょうぶさ」と「運動神経」の2つにすぎない。他の多くの項目で2～3割の子どもたちが、自信を失っているようすが見い出される。

なお、部分的だがおもしろいのは、いかにも現代っ子的特徴を思わせるような、「歌手やタレントにくわしい」「イラストやまんががうまい」「人前で発表する力」「ファミコンがうまい」などで、他の項目より「自信がない」者が多い点だ。現代っ子といっても、すべてがそうした特性を持つわけではなく、いわば旧人類的な不器用さを持った子もいるのであろう。

また、次の図6によると、ここでも性差は

それほど明瞭でない。大きく差があるのは、男子にファミコン名人が多いことだけで、あとは多少運動神経に自信を持つ者が多い、算数ができる、人前で発表する力、イラストやマンガが上手（男子）、人に親切で国語ができる、きまりを守る、歌手やタレントにくわしい（女子）となっているが、全体としては似たプロフィールを示している。

また図7には、学年による推移を見るために、4年と6年の結果を示した。図が示すように、ほとんどの項目で、わずかではあるが、学年が上がるにつれて自信を失っていく子どもたちの姿がある。人生とは挫折の歴史であるという言い方もされるが、自己像はそうした中で、むしろ大きさと積極性を示すものへと変化していくのが課題ではなかろうか。でなければ、子どもたちの行く手に待ち受けている数々の困難を、どうして乗り越えていけるだろう。

そうした意味でいけば、このデータが示すような早期から小さく萎縮していく傾向にある現代っ子の自己像を、どうしたら支え、より大きく積極的なものへと変化させていくことができるか。これが、今後われわれに与えられた大きな課題であらう。

図5 今の自分に自信があること

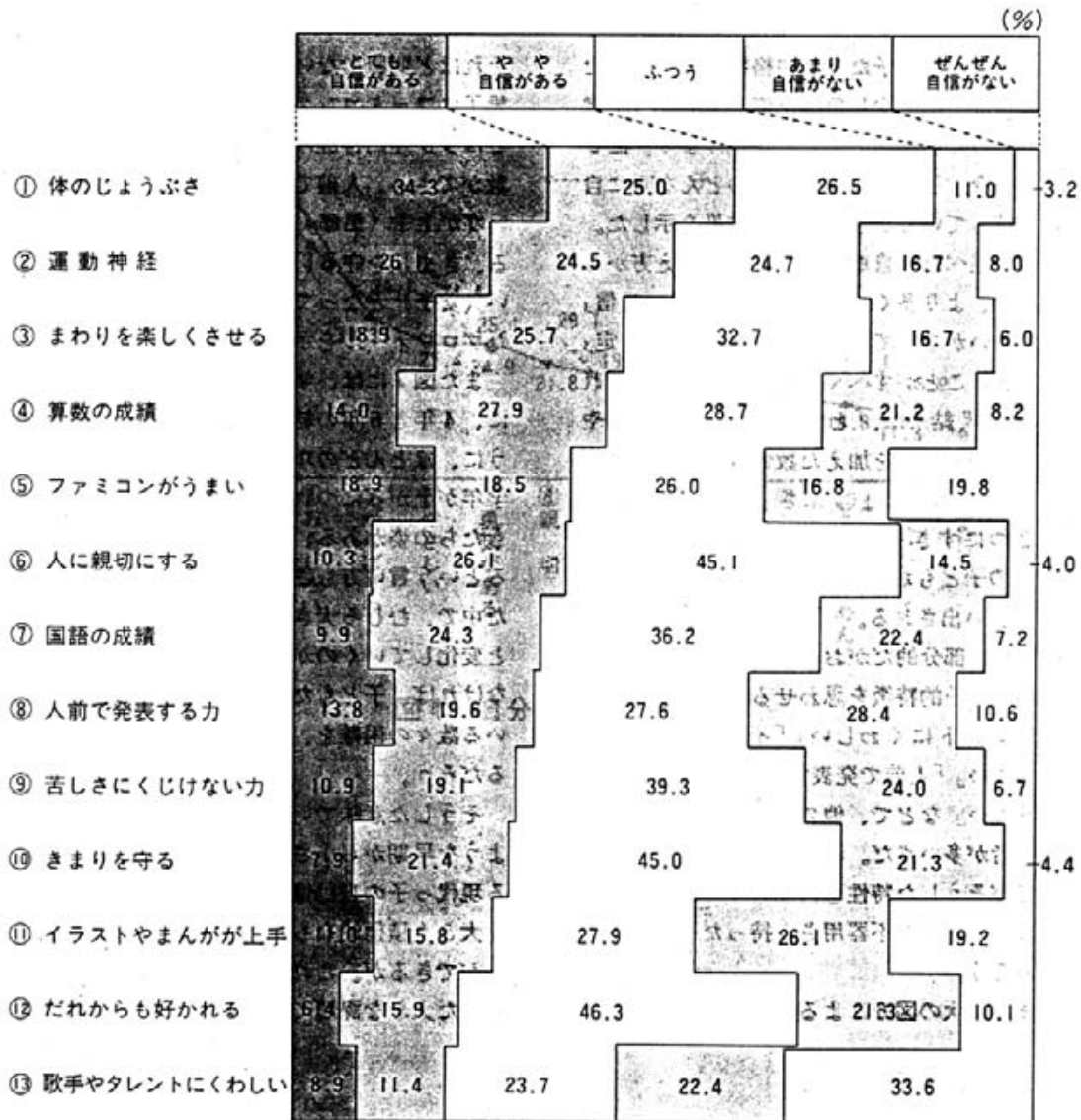


図6 今の自分に自信があること×性別

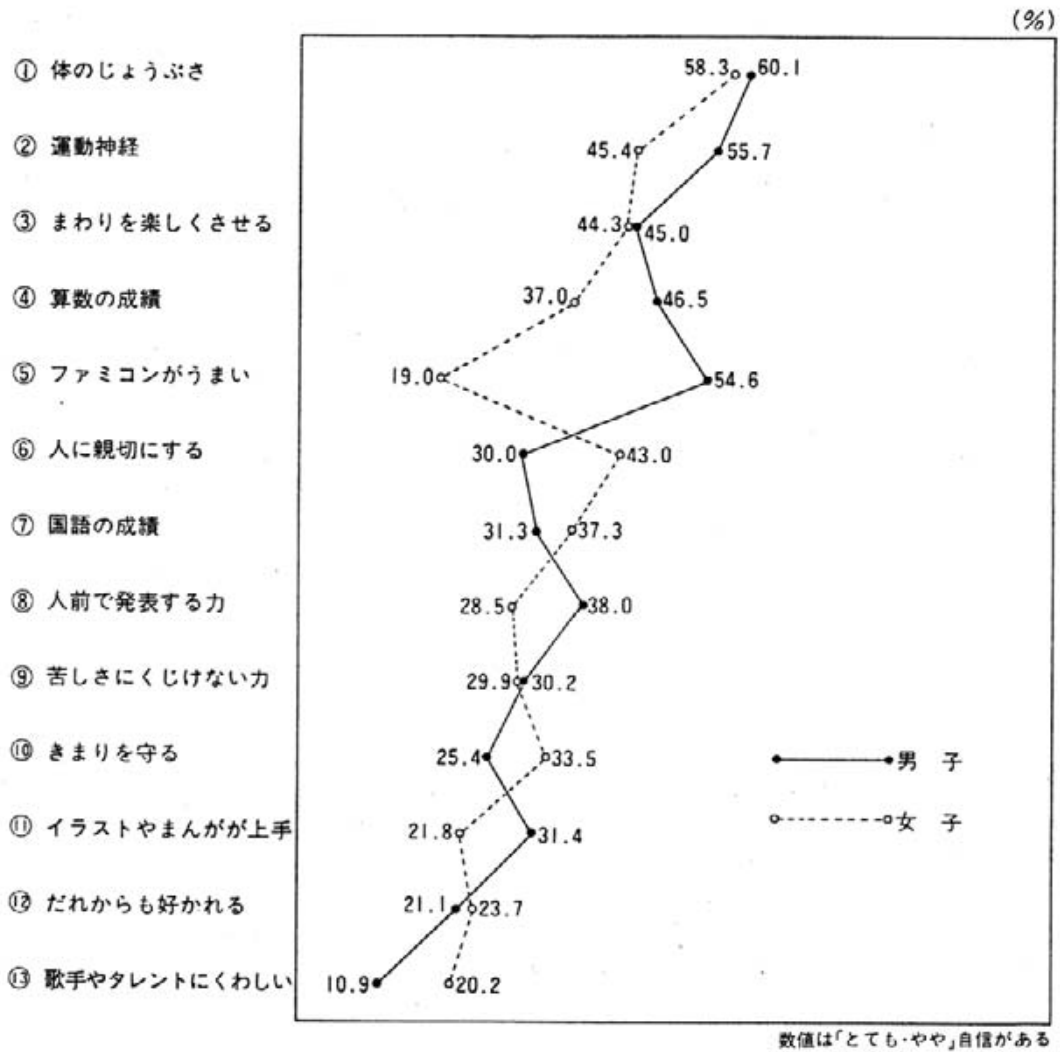
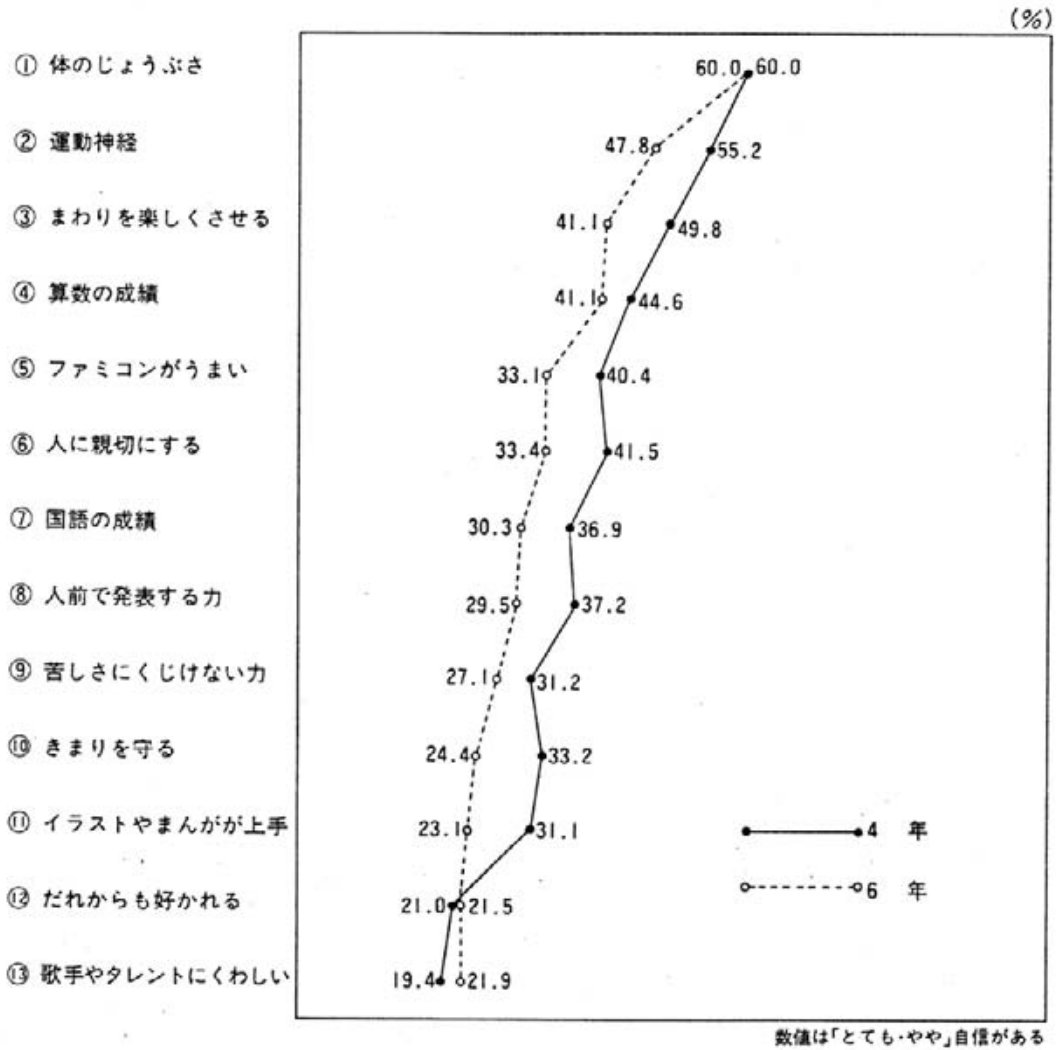


図7 今の自分に自信があること×学年



2. 周囲の人びとから見た自分



人がその自己像を形成していくのは、周囲の人びとのまなざしによる部分が大きいとされる。自分で自分を親切だと思っても、周囲の人びとが「あなたは冷たい」と声をそろえて言いたてれば、自己像は（実体——つまり本当はその人はどうであるか——にかかわらず）修正され、「冷たい自分」という

イメージを描くようになるだろう。しかしその修正も、必ずしも完全には修正しきれない部分が残って、人は大なり小なりそのギャップに悩むものではなかろうか。この章では、自己像をそうした外側からのまなざしに照らして見てみることにしよう。

//// 他人からの評価とのズレ ////

子どもたちが心ひそかに自分の中で育てている自己像は、他人——とくに子どもにとっては意味のある他人（significant othersと社会学では名づけている）からのまなざしと、どんな点でズレがあるのだろうか。

図8は、「両親」「先生」「友だち」から自分がどう思われているか、それと自分がとらえている自己像とは、どこがどのくらいズレ

ているか、示したものである。

まずとりあげた8項目の特性は、どれもポジティブなものだから、「絶対、多分そう（そう思っている）」とする者の数値が大きいほど、自分を肯定的にとらえている（とらえられている）ことになる。それぞれの図の一番上の「自分」にまず注目していくと、否定（そうでない）より肯定する者が多い項目は、先に

図8 自己像と周囲の人から見た自分とのずれ

		(%)			
		「そういう子 ぜったい そう思っ ている」	「たぶん （そういう子 そう思っ ている）」	「たぶん （そうでない そう思っ ていない）」	「そうでない ぜったい そう思っ ていない」
① 明るくおもしろい					
自分	28.3	41.8	22.9	7.0	
両親	27.5	41.3	23.2	8.0	
友だち	18.9	42.7	27.9	10.5	
先生	17.3	38.0	31.6	13.1	
② 親切					
自分	13.3	42.8	35.2	8.7	
両親	15.6	42.0	32.9	9.5	
友だち	5.9	35.2	46.2	12.7	
先生	6.4	33.0	45.8	14.8	
③ スポーツがとくい					
自分	26.3	29.6	29.4	14.7	
両親	26.9	29.1	30.0	14.0	
友だち	19.2	27.8	34.3	18.7	
先生	18.0	26.7	36.7	18.6	
④ こつこつ努力する					
自分	9.3	36.0	40.7	14.0	
両親	10.8	33.9	42.6	12.7	
友だち	4.3	27.1	52.9	15.7	
先生	3.9	26.7	50.5	18.9	

		(%)			
		ぜったい(そういい子 そう思っている)	たぶん(そういう子 そう思っている)	たぶん(そうでない そう思っていない)	ぜったい(そうでない そう思っていない)
⑤ 人に好かれる	自分	11.4	32.9	42.7	13.0
	両親	13.7	36.4	38.7	11.2
	友だち	6.4	31.4	45.9	16.3
	先生	6.0	30.0	47.5	16.5
⑥ たよりになる	自分	7.6	33.1	44.6	14.7
	両親	11.2	37.6	39.4	11.8
	友だち	4.3	31.7	50.1	13.9
	先生	3.0	23.6	53.9	19.5
⑦ 勉強ができる	自分	8.2	29.3	46.0	16.5
	両親	9.8	29.9	43.0	17.3
	友だち	6.6	24.1	46.7	22.6
	先生	4.4	23.8	49.9	21.9
⑧ リーダー的	自分	3.8	21.5	46.9	22.8
	両親	8.9	22.2	49.7	19.2
	友だち	5.1	19.2	48.4	27.3
	先生	5.3	18.8	50.0	25.9

も見てきたように、「明るくておもしろい」(70%)「親切」(56%)「スポーツが得意」(56%)であり、他はむしろ否定する者のほうが多い。全体としては、先に見てきたように、軽口でソフトな自分以外のシンのある(重みのある)自分というイメージはここでも見い出されない。

そして、8つの図はどれも左下りのな特徴を示していることに、注目しなければならないだろう。まず自分と両親とでは、両親は自分を、自分が考えているのとピッタリ同じかむしろ過大評価ぎみにとらえていてくれる、と子どもたちは言っている。そして友だちは両親よりずっと冷ややかで、先生はいちばん冷たい評価をしている存在だともとらえられている。

これを見やすくするために、「両親」「自分」

「先生」の分だけぬき出し、学年ごとにまとめた(5年生は省略)のが、図9、図10である。「自分」と「両親」の線が接近し、「先生」からの分が大きく水を空けているようすがよくわかる。また4年と6年では、図中に平均値を示したように、とくに教師からのポジティブな評価の予想が、他とくらべて大きく(5%)ダウンしていることも示唆的だ。教師は子どもたちの1人ひとりから、もっと「自分に温かいまなざしを注いでくれる人」という把握をされる存在でなくてよいのだろうか。子どもたちの自己像、とくに自尊感情とよばれるような肯定的な自己像の形成には、一人ひとりの子どもに注がれる教師のまなざしが、両親と共に大きな役割を果たすように思われるのだが。

図9 自己像と周囲の人から見た自分とのずれ(4年生)

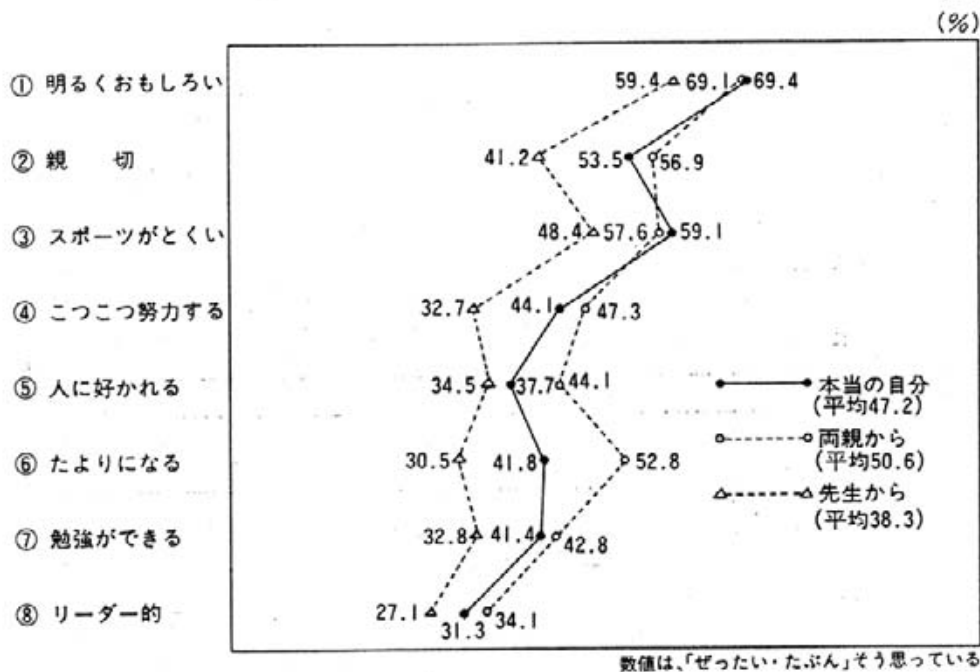
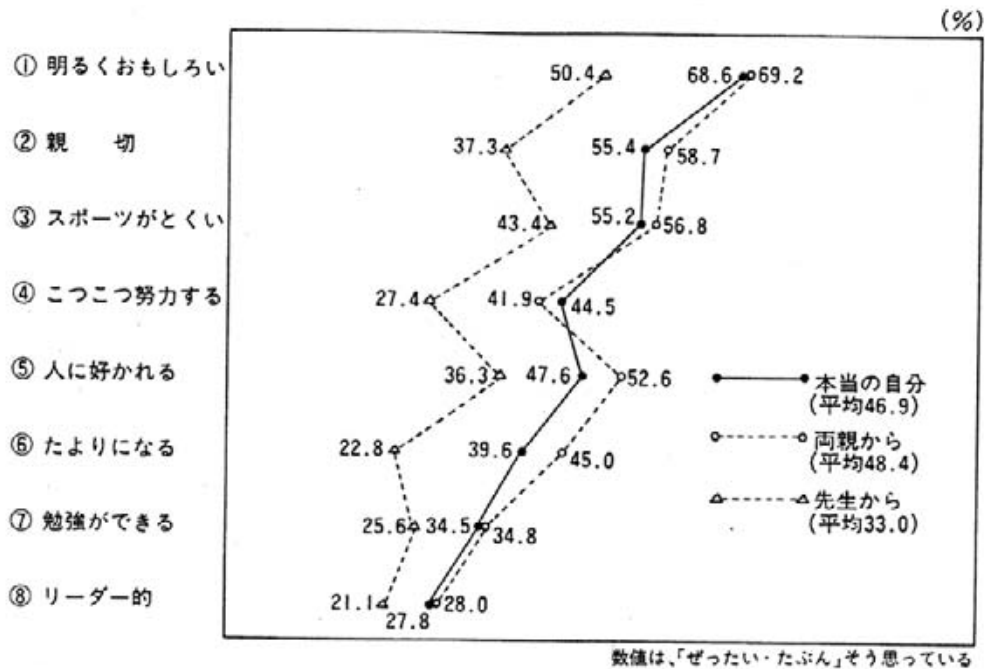


図10 自己像と周囲の人から見た自分とのずれ(6年生)



友だちに言われていやなこと

人間はだれしも、他人からの評価に敏感だ。とくに自分にとって大切な人、意味ある人からの評価には一層敏感になる。それはそうした人びとの評価によって、辛くも支えられている「本当は自信の持てないちっぽけな自分」が心の奥にあるからではなからうか。

図11は、そうした側面を見た結果である。図が示すように、子どもがいちばん傷つく悪口は「不潔」「だらしが無い」であって、このことは例の「いじめ」の対象にされる子どもの特性を思い起こさせる。現代っ子はなぜこうした衛生や整とんなどに関わる部分にこ

れほど過敏なのか。われわれには理解しにくいメンタリティの一つである。

子どもたちがよく口にする(ネガティブな意味をもつ)言葉に「暗い」があるが、ここでもちゃんと5位に食い込んでいる。また「頭が悪い」のはいやだが、「カリ勉」とも言われたくない、という見栄的な心情も、ちゃんと表れてきている。下のほうでおもしろいのは「まじめ」で、いや(言われたくない)という子は35%だが、逆に言われるとうれしい子も24%いる。「まじめ」はかつて旧世代の生活信条であり社会的価値であった。それが

現代ではむしろ、からかい半分に使われることが多くなってきている。しかし、果たして人生は「まじめ」に生きることを捨てて明るく楽しく暮らしていけるほどの優しさを、われわれに示してくれるものに変化してきたと言えるのだろうか。

次に図12は性別だが、女子のほうがより悪口に傷つきやすい傾向が見られる。図13の学年別では、4年生のほうが6年生より傷つきやすい面が現われている。成長に従って少しずつ自分がゆるぎのない姿を備えていくようすが、かい間見られる結果である。

図11 友だちから言われていやなこと

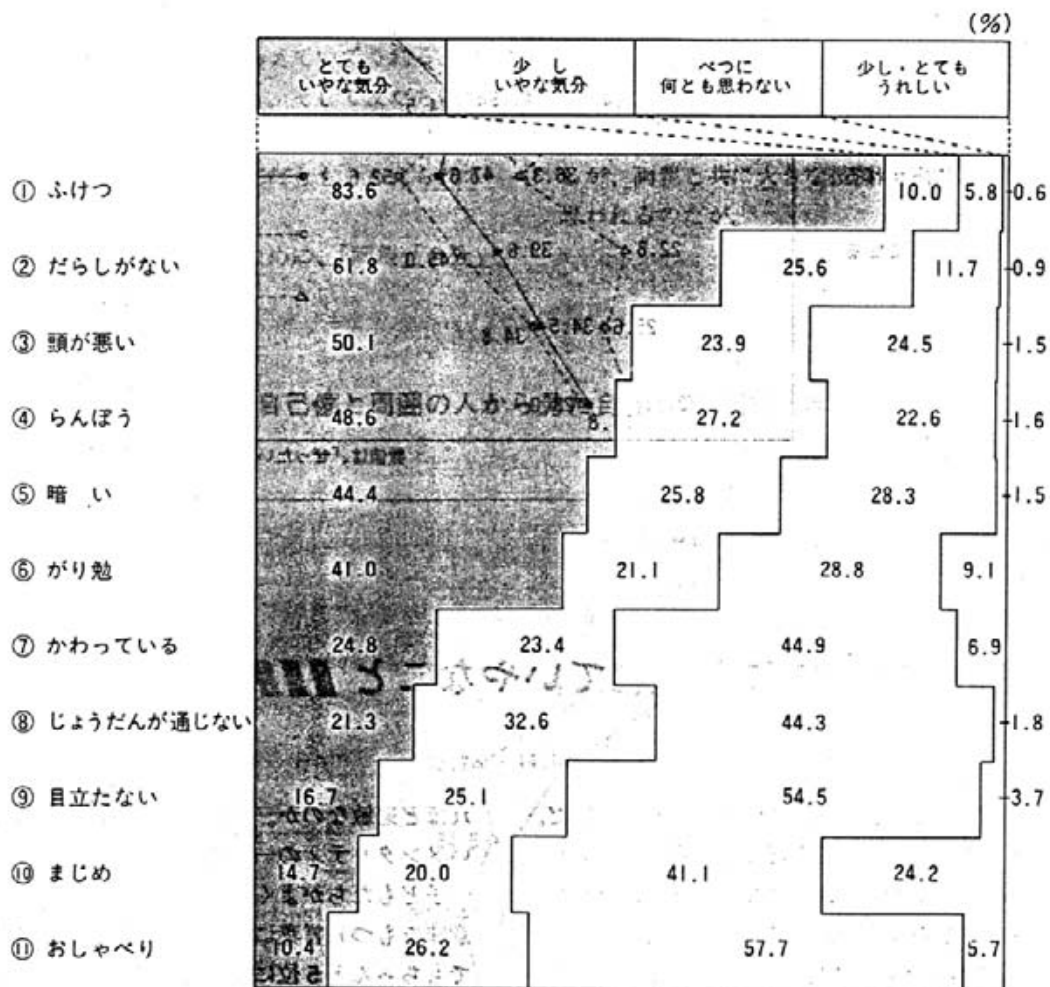


図12 友だちから言われていやなこと×性別

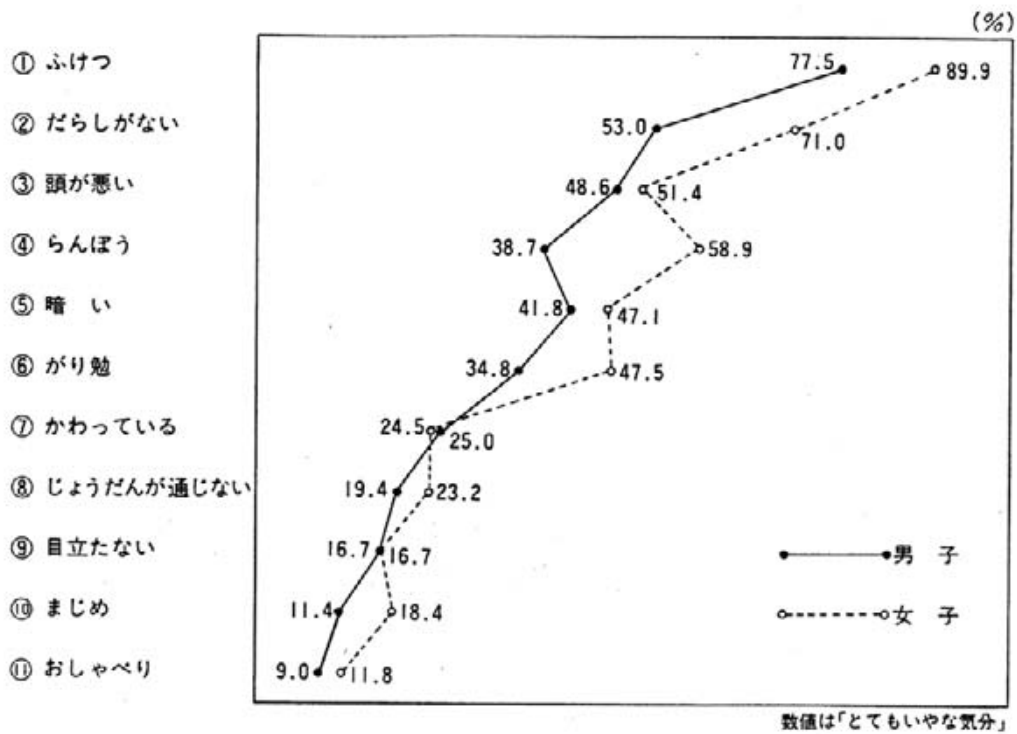
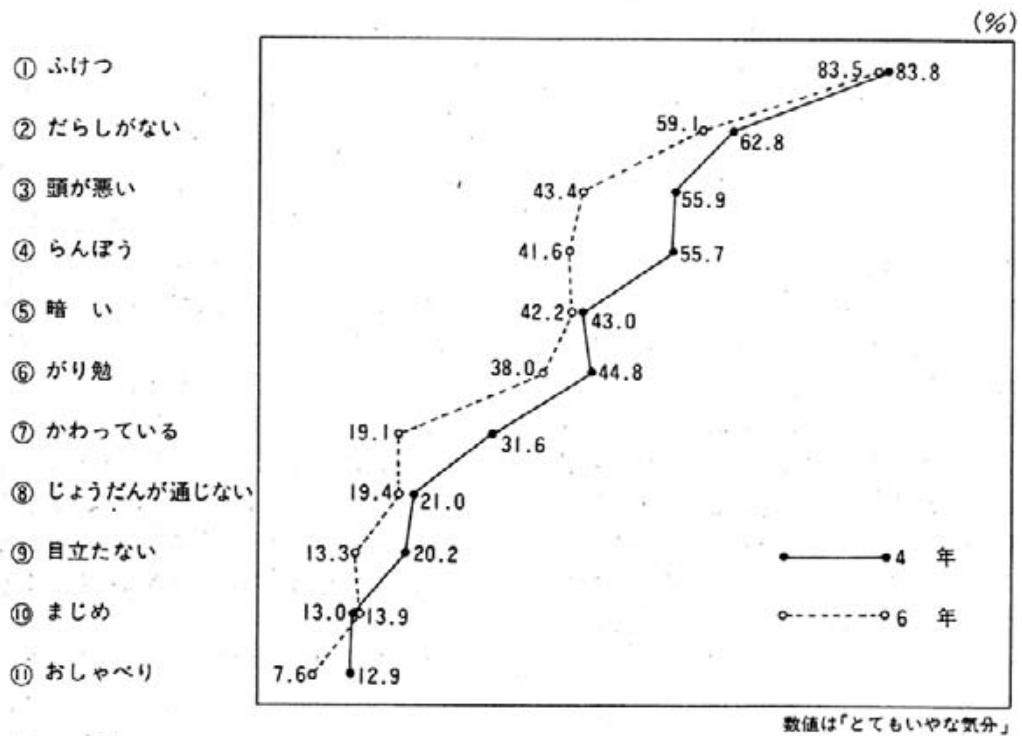


図13 友だちから言われていやなこと×学年



3. 小学生の成長感覚



/// この2～3年で変わってきたこと ///

以上に指摘してきたようないくつかの問題を含みながらも、また個人差こそあれ、子どもたちは日々何らかの成長を果たしているはずの存在だ。

子どもたちは、自分をどのくらい「成長しつつある」、または「未熟なものから良きものへ」と変化しつつある存在としてとらえることができているのだろうか。

図14には、過去2～3年の間に、自分はどんなふうに変わってきたかをたずねた結果を、そして図15、図16には、それを性別・学年別に集計した結果を示してある。図が示すように、この2～3年の間に自分がよくなったことの筆頭には「友だちの数がふえたこと」が挙げられ、ついで「明るさ」で、第1章で見てきた現代っ子の「自分の長所」が、加齢と共により明確に形成されてきている（と子ども

たちが感じている）ようすがわかる。そして、「がんばる子になってきた」「成績がよくなってきた」とする者も5割に達しており、この数字は決して悪くない数字である。人間にとって一番大切なのは、現状そのものより、自分がよきものへと変化していくという「感じ」、また現状より将来はよりよきものへと展開してゆくだろうとの「見通し」だからである。

また図15によれば、おもしろいことに、この感覚は、どういうわけか男子より女子が、ほとんどの面でより多く持っている。この説明を、読者の方がたからいただきたいものである。

また図16は学年別の結果である。全体としては差が少ないものの、唯一気になるのは、「がんばり」「成績」といった大切な（われ

われ旧世代には少なくともそう思われる)部分で、6年生にかなりの落ち込みが見られる点だ。

この点をさらに追ってみよう。図17は13の特性で「自分はよくなってきた」とする者のパーセンテージを、勉強に自信のある子とない子の2つのグループ間で見た結果である。

図が示すように、すべての特性の面で、勉

強に自信のある子は、大きな成長感覚を抱いている。能力と全く関係のないはずの、明るさ、親切さ、礼儀といった面まで、勉強に自信のある子が「だんだんよくなってきた自分」という感覚を持つのは、なぜだろう。これでは、成績の悪い子(勉強に自信の持てない子)は、ふんだりけったりではなからうか。

図14 この2～3年でも変わったこと

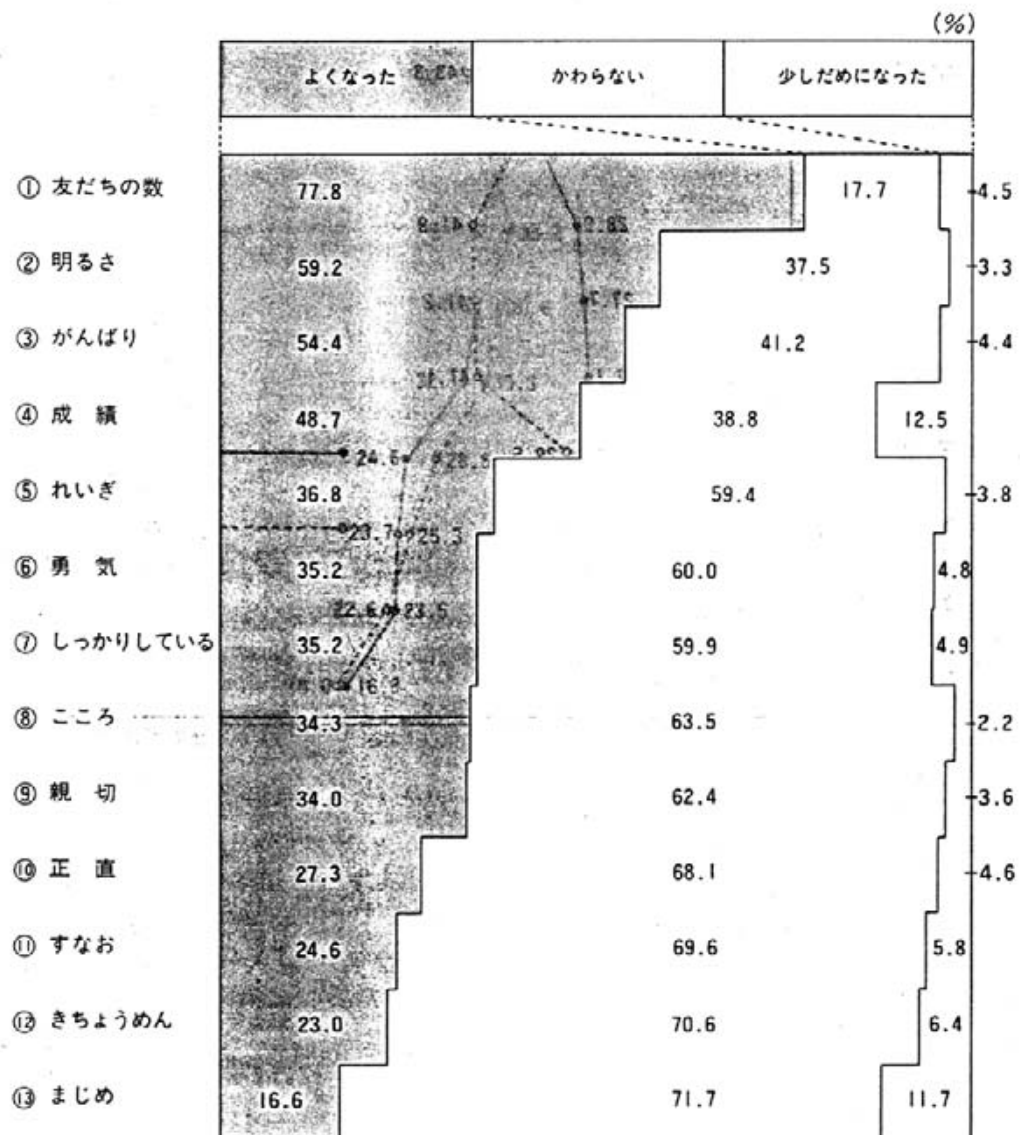


図15 この2～3年でよくなったこと×性別

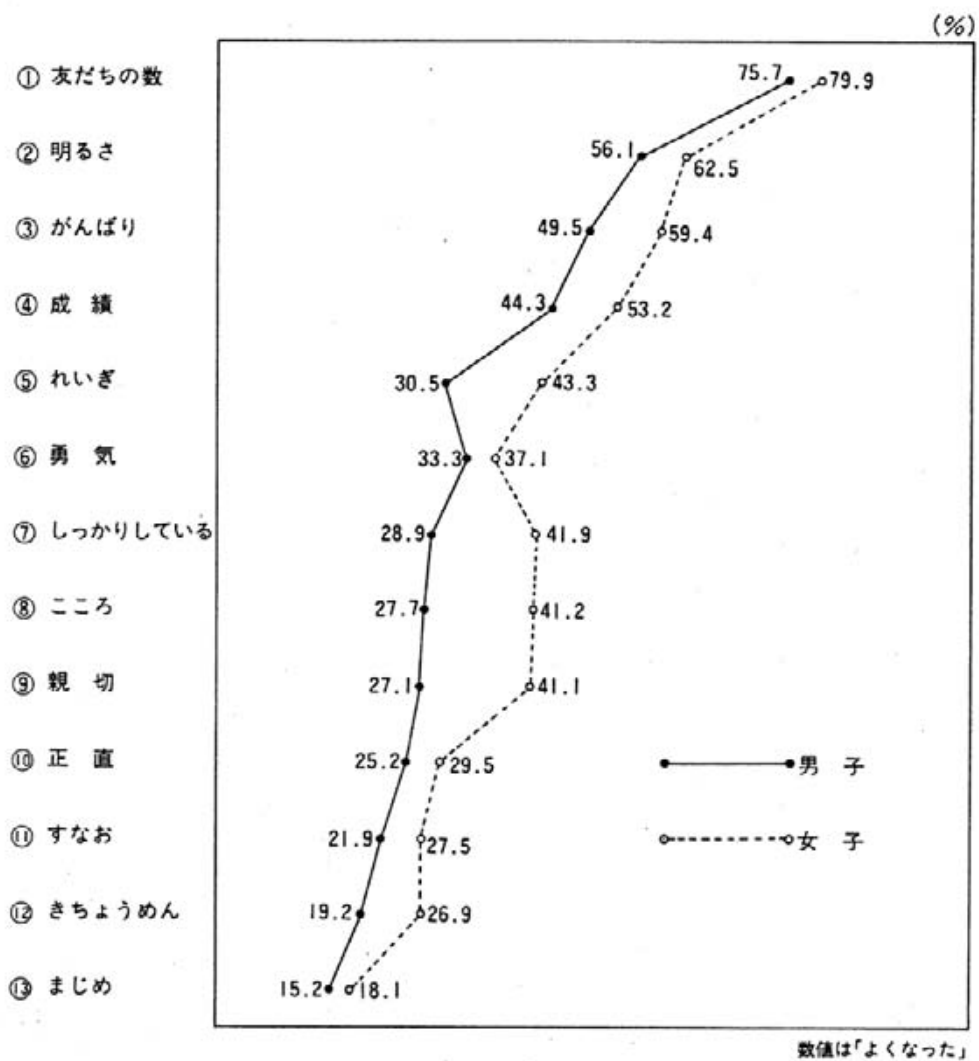


図16 この2～3年でよくなったこと×学年

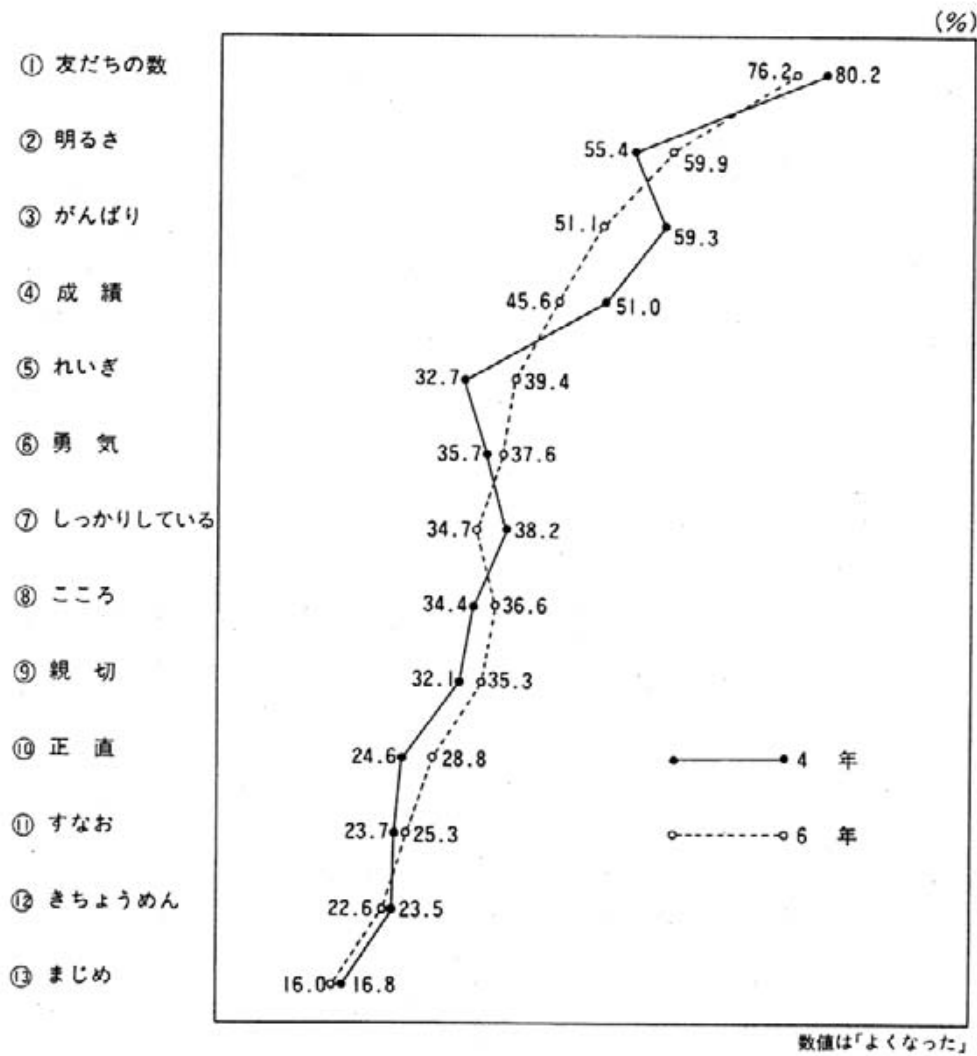
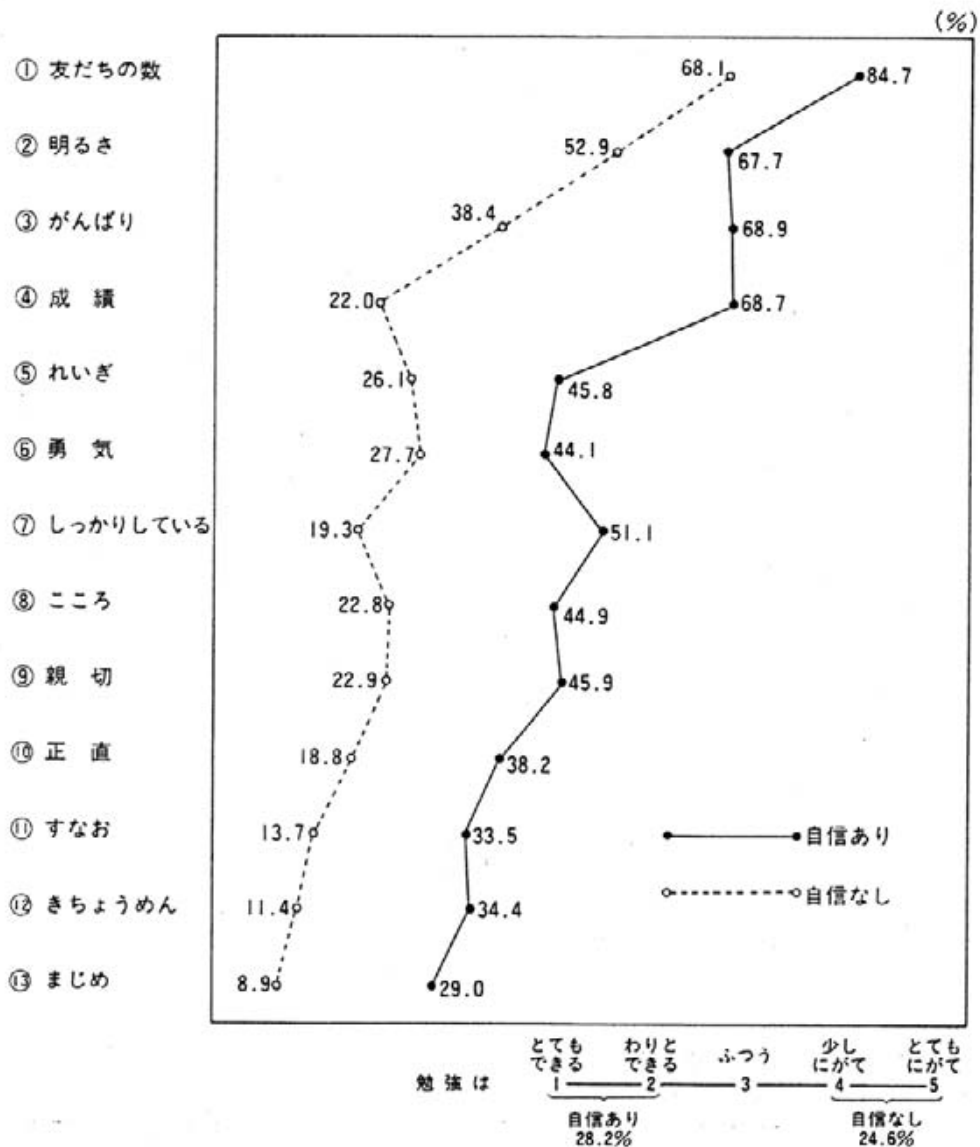


図17 この2～3年でよくなったこと×勉強への自信



今よりよくなりたいこと

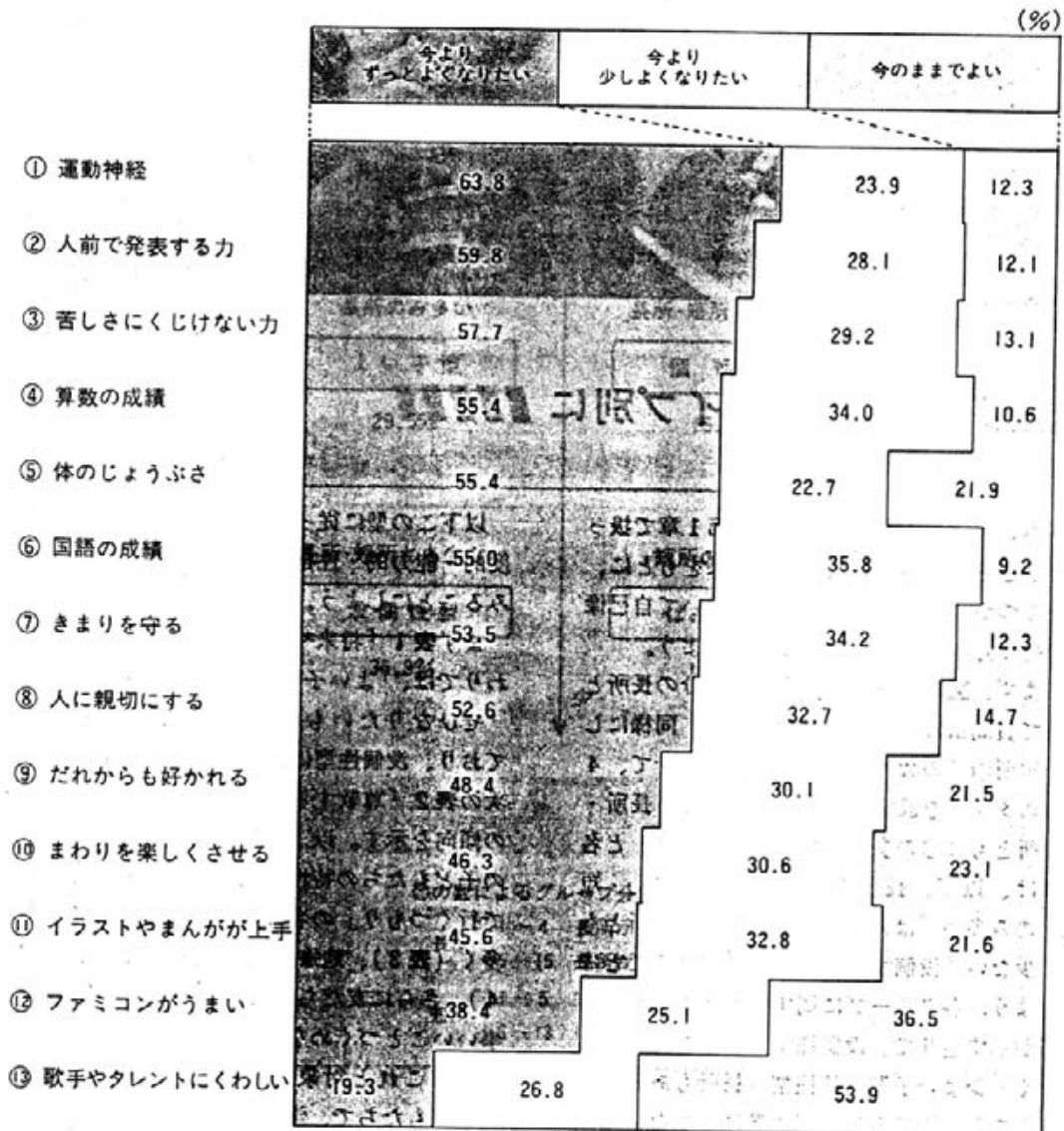
では子どもたちは、将来に向けて、自分のどんな面をよりよいものにしたい、またはどの側面で成長をはかりたいと考えているのだろうか。図18によると、まず全体としては、

たいいこの面で子どもたちが、「もっとよい自分でありたい」と望んでいることがわかる。「今のままでよい」のは、「これ以上歌手やタレント通にはならなくてよい」と「ファ

ミコンもだいたいこの辺で」の2項目にすぎず、あとは8割かそれ以上が、「もう少し」または「ずっと」よくなりたい、と答えている。これが努力を伴うかどうかは別として、少なくとも紙の上のレベルでは、子どもたちの成長欲求は、かなりのものと言えそうだ。しかもそれがソフトで軽い人格的側面（下

位の5項目）より、ハードで重たい部分（「苦しさにくじけない力」「発表力」「成績」「きまりを守る」など）にわずかながらより大きな欲求が示されている点がおもしろい。心の奥では子どもたちも、軽口でソフトな自分よりもう少し存在感や力のある自分でありたいと願っているのかもしれないのである。

図18 今よりよくなりたいと思うこと



4. 自己像の構造



//// 子どものタイプ別に ////

本レポートのまとめとして、第1章で扱った子どもたちの長所と短所の結果をもとに、いくつかの類型を作り、それを用いて自己像の持つ意味を探ってみることにしよう。

まず、図19に示したように、自分の長所として質問紙につけた○の数の多少、同様にして短所の○の数の多少とを組み合わせ、4つのタイプを設定してみた。そして、長所・短所ともに○の多かった群を「個性型」と名づけ、以下、長所のみ多い「よい子型」、短所のみ多い「はみ出し型」、長所・短所ともに少ない「没個性型」と一応名づけることにしよう。各グループに属する子どもの割合は図が示す通りで、没個性型（可もなく不可もなく）>よい子型>個性型（長所もあるが欠点もある）>はみ出し型の順に多くなっていることがわかる。

以下この型に従って、子どもたちの持つ態度的・能力的・性格的諸特性を明らかにしてみることになろう。

まず表1「将来やってみたい仕事」との関わりでは、「よい子型」の子どもがいちばん「ぜひやりたいものがある」(27%)とっており、没個性型は逆にその数字が一番低い。次の表2「尊敬する人の有無」も、全く同様の傾向を示す。以下同様にして「よい子型」の子どもたちの特性を見ていくと、「大学まで行くつもり」の者が他の型にくらべて一番多く(表3)、勉強への自信も持っている(表4)。さらに友だちの数も多くて(表5)、万事いいことづくめなのである。

他方これと対象的なのは、「はみ出し型」の子どもたちで、学校は中学か高校までで終わりたいとする者が43%とどの型よりも多く

(表3)、むろん勉強に自信もない(表4)。友だちも他の型より少なくしか持っていないのである(表5)。

自分に対する適応や満足感の程度を表す「あなたは自分が好きですか」という質問に対しての反応が、次の表6である。ここでもこれまでと同様な傾向は見られるが、さらにおもしろいのは、そうした自己への満足感は、「よい子型」だけでなく、「個性型」にも同じく

らい見い出される点だ。このことは、人間にとって欠点の数は大した問題ではなく、むしろ長所の数こそが、自己像の受け入れにつながるということを示していよう。健康な自己肯定感を育てるためには、欠点を言いたるより長所を認め、これを育てることのほうが大切であると示唆された結果だとも言えるかもしれない。

図19 タイプわけ

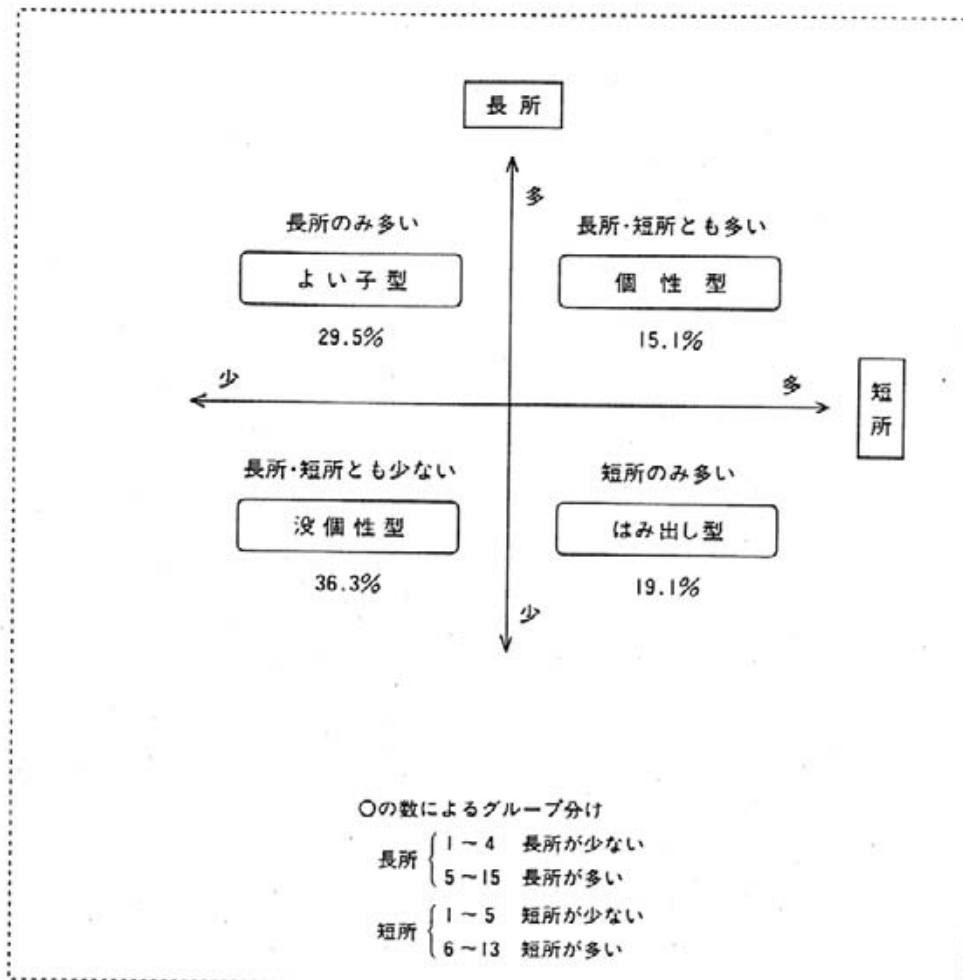


表1 将来やってみたい仕事の有無×タイプ

尺 度	タイプ			
	1. はみ出し型	2. 没個性型	3. 個性型	4. よい子型
ぜひぜひなりたいものがある	22.9	16.7	24.9	26.6
なりたいものはあるがかわるかもしれない	32.6	28.9	42.0	39.9
とくになりたくないものはない	44.5	54.5	33.1	33.5

○ = 最大値
 ~~~ = 最小値

表2 尊敬する人の有無×タイプ

| 尺 度        | タイプ      |         |        |         |
|------------|----------|---------|--------|---------|
|            | 1. はみ出し型 | 2. 没個性型 | 3. 個性型 | 4. よい子型 |
| とてもそんな人がある | 32.9     | 26.3    | 38.5   | 49.6    |
| まあそんな人がある  | 17.9     | 22.7    | 23.9   | 23.3    |
| とくにいない     | 49.2     | 51.0    | 37.6   | 27.1    |

○ = 最大値  
 ~~~ = 最小値

表3 将来の進路×タイプ

| 尺 度 | タイプ | | | |
|---------------|----------|---------|--------|---------|
| | 1. はみ出し型 | 2. 没個性型 | 3. 個性型 | 4. よい子型 |
| 大学へ行くつもり | 41.5 | 44.0 | 45.6 | 54.9 |
| 短大か専門学校へ行くつもり | 15.5 | 16.5 | 22.1 | 18.0 |
| 中学校や高校くらいまで | 43.0 | 39.5 | 32.3 | 27.1 |

○ = 最大値
 ~~~ = 最小値

表4 勉強への自信×タイプ

(%)

| タイプ         | 1. はみ出し型 | 2. 没個性型 | 3. 個性型 | 4. よい子型 |
|-------------|----------|---------|--------|---------|
| とても、わりとできる  | 15.0     | 20.5    | 28.0   | 43.0    |
| ふつふつ        | 49.8     | 51.4    | 41.8   | 44.9    |
| 少し、とてもにかたがた | 35.2     | 28.1    | 30.3   | 12.1    |

○ = 最大値  
~~~~ = 最小値

表5 友だちの数×タイプ

(%)

| タイプ | 1. はみ出し型 | 2. 没個性型 | 3. 個性型 | 4. よい子型 |
|-------------|----------|---------|--------|---------|
| とても、わりと多い | 45.5 | 61.8 | 67.8 | 83.5 |
| ふつふつ | 34.7 | 30.9 | 18.3 | 13.3 |
| あまり、ぜんぜんいない | 19.9 | 7.3 | 13.8 | 3.2 |

○ = 最大値
~~~~ = 最小値

表6 自分を好きか×タイプ

(%)

| タイプ       | 1. はみ出し型 | 2. 没個性型 | 3. 個性型 | 4. よい子型 |
|-----------|----------|---------|--------|---------|
| とても、わりと好き | 30.3     | 44.5    | 61.4   | 61.1    |
| ふつふつ      | 41.7     | 44.6    | 30.1   | 29.3    |
| 少し、とても嫌い  | 28.0     | 10.9    | 8.5    | 9.6     |

○ = 最大値  
~~~~ = 最小値

//// 長所・短所の意味 ////

最後に、第3章で述べた「成長感覚」とこの4つのタイプとの関係についても確かめておきたい。

表7は、過去2～3年の間に「自分がよくなった」という感覚の有無を4つのタイプごとに整理した結果だ。予想されたこととはいえ、圧倒的に「よい子型」の子どもがゆるぎ

のない成長感覚を持っている。他方、「はみ出し型」の子どもたちの中で同様な確信を持つ子は、大半の項目で「よい子型」の半分程度でしかない。自らが抱く自己像、そしてそれを構成する長所と短所の自覚がこれほどの重みを持つことを、あらためて知らされた思いがする。

表7 この2～3年でよくなったこと×タイプ

| 項目 | タイプ | | | |
|------------|----------|---------|--------|---------|
| | 1. はみ出し型 | 2. 没個性型 | 3. 個性型 | 4. よい子型 |
| ① 友だちの数 | 65.0 | 76.9 | 70.4 | 88.0 |
| ② 明るさ | 50.8 | 49.8 | 61.9 | 70.7 |
| ③ がんばり | 38.6 | 47.5 | 54.2 | 70.4 |
| ④ 成績 | 39.6 | 45.8 | 39.8 | 60.3 |
| ⑤ れいぎ | 30.0 | 31.4 | 30.2 | 47.6 |
| ⑥ 勇気 | 19.5 | 27.9 | 41.5 | 46.9 |
| ⑦ しっかりしている | 22.6 | 27.3 | 30.2 | 52.2 |
| ⑧ ところ | 20.1 | 23.1 | 38.5 | 50.8 |
| ⑨ 親切 | 20.2 | 25.0 | 32.0 | 51.1 |
| ⑩ 正直 | 16.1 | 19.6 | 30.4 | 38.8 |
| ⑪ すなお | 17.4 | 17.4 | 22.6 | 34.9 |
| ⑫ さちょうめん | 12.5 | 16.8 | 22.7 | 33.7 |
| ⑬ まじめ | 10.2 | 12.6 | 17.5 | 23.7 |

数値は「よくなった」

また表8は、将来に向けて抱いている成長欲求をタイプごとに整理してみたものだ。ここでは、表7で見た過去から現在にかけての成長感覚とは多少違って、最も強い成長欲求を抱いているのは、「よい子型」よりむしろ「個性型」の子どもたちであることがわかる。また、今まではどの側面でも全く積極的な姿勢を見せなかった「はみ出し型」も、かなりの側面で「個性型」に匹敵するほどの成長欲求を示している点がおもしろい。ただしその内容は、個性型がファミコン名人以外のすべての

面に及んでいるのに対して、「はみ出し型」は成績やがんばりなどハードな面よりも、「運動神経」「発表力」「体の丈夫さ」「親切」「ファミコン」「タレントにくわしい」などの面に見られるという傾向は、やはりこの型の面目が発揮されているとも言えそうだ。すなわち、「短所」も1つの個性なのだろう。

それにひきかえ、「長所」もなく「短所」もない「没個性型」の子どもが一番の問題だとも言えそうだ。

表8 今よりよくなりたいと思うこと×タイプ

| 項目 | タイプ (%) | | | |
|----------------|----------|---------|--------|---------|
| | 1. はみ出し型 | 2. 没個性型 | 3. 個性型 | 4. よい子型 |
| ① 運動神経 | 69.2 | 57.5 | 69.2 | 64.4 |
| ② 人前で発表する力 | 65.3 | 55.7 | 65.2 | 58.4 |
| ③ 苦しさにくじけない力 | 61.3 | 50.7 | 63.9 | 60.6 |
| ④ 算数の成績 | 56.6 | 51.0 | 58.4 | 57.3 |
| ⑤ 体のじょうぶさ | 60.2 | 50.4 | 60.6 | 56.0 |
| ⑥ 国語の成績 | 56.9 | 53.2 | 59.0 | 53.5 |
| ⑦ きまりを守る | 54.5 | 48.5 | 59.5 | 55.8 |
| ⑧ 人に親切にする | 57.1 | 45.6 | 57.8 | 55.8 |
| ⑨ だれからも好かれる | 55.5 | 38.6 | 57.3 | 50.8 |
| ⑩ まわりを楽しくさせる | 50.8 | 38.5 | 52.7 | 48.2 |
| ⑪ イラストやまんがが上手 | 48.7 | 40.0 | 50.0 | 47.0 |
| ⑫ ファミコンがうまい | 41.9 | 40.2 | 39.1 | 34.1 |
| ⑬ 歌手やタレントにくわしい | 21.5 | 17.6 | 21.7 | 18.6 |

数値は「今よりずっとよくなりたい」

5. まとめに代えて



子どもたちの中にある「自分」の姿を、いくつかのデータによって明らかにしてきたわけだが、最後にまだ使っていないデータにもふれながら、まとめとしたい。

この年齢の子どもたちには、まだ確とした未来像があるわけではない。むろん将来の進路をたずねられれば、5割が4年制大学へ進学するつもりと答え、短大や専門学校を含めると、7割近くがかなり後まで学校へ行くつもりと答えている(図20)。しかし、それが明瞭な目的意識の存在を示すものでないことは、図21「おとなになったらなりたいもの」をたずねられて、「まだよくわからない」と答える子が4割を越え、「一応あるけど、変わるかもしれない」が3割を越えていることからわかる。

また、人は尊敬する人に会うことで、将来への道筋を描くことがあるものだが、図22で示したように、とても「尊敬する人」がいると答える子は、4割にみえないのである。

となると、子どもたちにとって現在最も意味を持つのは自分であり、現在の「自分」、すなわち自己像なのであろう。むろんトータルには多くの子どもたちは自分を好き(図23)であり、自己を否定的にとらえている者は、15%ほどでしかない。また性役割の受容(図24)の度合いを見てみれば、男子で95%、女子の71%は、自分の性別に満足している。女子の性役割受容率が少し低いのが気になるが、この数字はまあまあなものと言えるだろう。

しかしすでに1章から4章にかけて見てきたように、子どもたちの中の「自分」には、目をこらせばたくさんの問題点が見い出される。明るいばかりで、いまひとつシンの不足した自己像もそうだし、年齢を考えれば自分についての万能感(やれば何でもできそうだという感覚)をまだもって持っていてよいし、それが早くも学年の上昇と共に低下していく気配も気がかりだ。

また自己像について、それを支持してくれ

るのは両親だけで、友だちや先生の目には、かなりズレを感じているようすもある。とくに先生からは、あまり評価されていないという感じを持っている。

この2～3年で自分はよくなってきているという成長感覚は、むしろ多くの子が持っているし、成長への欲求も持っている。しかしそれは全体の姿ではなく、勉強に自信のある

子や自分の長所を確認できている子に、より十分に備わっているのである。そうでない子、たとえば何の特徴もない（「没個性型」とここでは名づけた）タイプの子にこれをどう持たせるかが問題だし、このサンプルについて言えば、このタイプが数の上では一番多いのだから、やっかいだ。

人の適応に大きな役割を果たすのは、いわ

図20 将来への進路

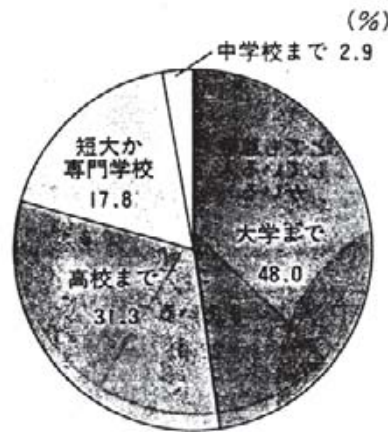
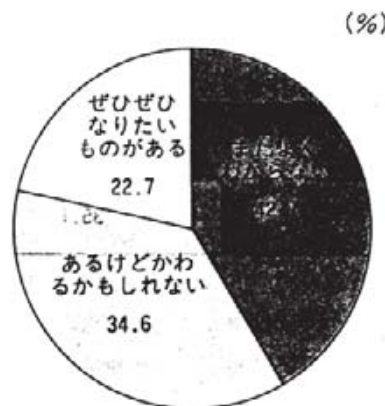


図21 おとなになったらなりたいもの



ゆる「自尊感情」であるとされる。この用語を使うなら、われわれは、放っておけば自分自身では自尊感情を形成しにくい現代的な条件の下にある子どもたちの中に、どうしたらそれを育ててやることができるかが、大きな課題であろう。そしてそのいくつかの方策の中で、このレポートが示唆したのは、他者——とくに子どもの身近にいて、親について最も

大きな影響力を持っているはずの、「教師」のまなざしのあり方ではなかろうか。40人の子どものすべてに、1人の例外もなく、「先生は自分を愛していてくれるし、信頼し、評価し、大切な存在と思っていてくれる」と思わせるその能力こそが、最近よく言われている「教師の力量」ではなかろうか。

図22 今、尊敬する人

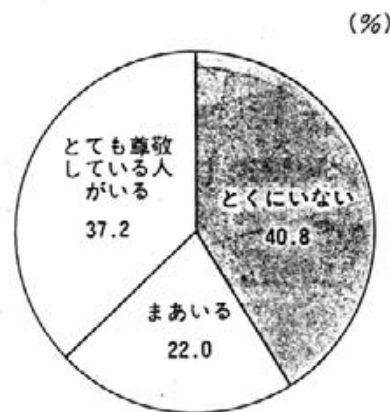


図23 自己受容(自分を好きか)

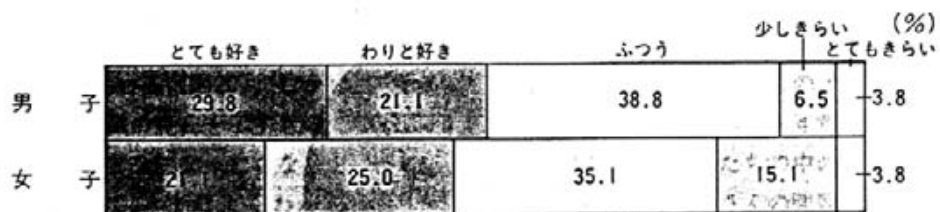


図24 性役割の受容(生まれ変わったら)

| | 男子 | | | 女子 | | |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | ぜったい男 | できれば男 | ぜったい女 | ぜったい女 | できれば女 | ぜったい男 |
| 男子 | 81.1 | 13.4 | 3.0 | 2.5 | 10.2 | 19.3 |
| 女子 | 10.2 | 19.3 | 23.8 | 46.7 | | |



※おことわり：本文中に使用した写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。